



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Decording Women's Voices : Independence and Dependence in WWII Literature through Digital Humanities
Author(s)	ススロフ, アルテム
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16968号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16968
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99812
Type	doctoral thesis
File Information	Artem_Suslov_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：SUSLOV ARTEM

審査委員	主査	教授	瀬名波	栄潤
	副査	教授	小椋	彩
	副査	教授	藤田	健
	副査	教授	橋本	健広（中央大学）

学位論文題名

Decoding Women's Voices:

Independence and Dependence in WWII Literature through Digital Humanities

（女性たちの声を聴く：

人文情報学が奏でる第二次世界大戦文学の自律と他律の音楽）

・当該研究領域における本論文の研究成果

本博士学位申請論文の新規性は、男性的とされる戦争を背景に、第二次世界大戦を経験した女性作家たちが伝統的ジェンダー規範に抵抗しながら独自の表現方法を作り出している様子を、人文情報学という新しいデータ処理技術を用いて証明している点にある。

まず何よりも、日本、英国、ソ連の3言語の500以上の文学テキストを対象として、比較検証を行ったことは特筆に値する。デジタル・ヒューマニティーズ研究の分野ではテキスト分析にかなりの手間をかけるが、ススロフ氏はそれを3カ国の文学テキストにおいて成し遂げている。また、登場人物の内面を炙り出す「感情抑制」モデルは、ススロフ氏が独自に発案したものであり、本申請論文の中でも際立ったものになっている。このように、デジタル・ヒューマニティーズ研究は、科学的・客観的に文学テキストを分析してみせる画期的なアプローチである。

研究成果は、第二次世界大戦で独自の体験をした3カ国の文学作品を比較検証し、その類似点と差異を明確にしたことである。民主主義的自由主義下の英国において女性作家はより直接的に表現し、共産主義的集団主義下のソ連（ソビエト・ロシア）では従属を装い、そしてまた日本はアジア的帝国主義の下では伝統的ジェンダー規範を逆転させることにより、女性作家たちは自己の声を奏でたと言える。それは、既存の精読批評（Close Reading）と人文情報学（Digital Humanities：DH 批評）、つまりコンピュータを用いた言語処理技術の一つで情報抽出の一分野である「固有表現抽出（Named Entity Recognition, NER 手法）」および「感情分析（Sentiment Analysis, SA 手法）」を組み合わせ、言語資料のデータ処理（コーパス分析）を施すことでより明らかになる。この結論は、まず NER 手法を用いてナラ

タイプ内のジェンダーの特色を類型化し、SA 手法によって感情表出具合を検証することで、男性中心的な戦争文学における女性作家の特徴を示す 2 つのパターン、すなわち脱男性化（demasculinization）と感情抑制（sentiment protection）の存在を挙げる。それをさらに精査すると、女性たちの戦争作品は、異なる社会的な制約の下にありながらも、自律と他律、抵抗と妥協といった対照的な表現方法を駆使していることが明らかになる。結果、本申請論文は、3 カ国をつなぐ女性の戦争文学作品はステレオタイプに抗いながらも、女性は自律と他律を迫られながら表現する様を明らかにしていると言える。この傾向は、人文情報学批評と精読批評、すなわちコーパスを用いた定量分析とフェミニスト文学批評を統合する、これまでに見られない斬新な手法で導き出している。

さらには、ススロフ氏はこれらの分析方法をツールキットにまとめ、作家個人の研究から多文化・他国間の文学まで比較できる汎用性の高い分析方法を最後に提示している。

・学位授与に関する委員会の所見

本申請論文は、膨大な資料をもとに 3 カ国の文学テキストを比較検討し類似点や相違点を明らかにしただけでなく、今後の比較文学研究のための分析方法をツールキットとして発案している点を審査委員会は高く評価した。

委員の中には、申請論文を英日露の個別の文学学会に投稿するよう勧める意見があった。また、書籍出版を視野に入れ、用語や語彙の統一や、表現の多義性、それぞれの言語が持つ独特の用法、などに配慮するようにとの意見もあった。そして、書籍出版の際には、ツールキットという最大の発明を演繹的に述べるのではなく、冒頭で紹介の方が効果的だという意見もあった。ただし、これらの課題や提案は本博士論文を審査する上では軽微なものといえ、その学術的価値を損なうものではない。

ススロフ氏は、2023 年 4 月に総長奨励金の援助を受け本学博士課程に進学し、2 年目と 3 年目は EXEX 博士人材フェローシップを獲得して研究に専念してきた。この 3 年間で、日本デジタル・ヒューマニティーズ学会の『デジタル・ヒューマニティーズ』誌から査読論文を 1 本、ロシアの『日本研究』誌からも査読論文 1 本、そしてアメリカで出版された研究書のロシア語翻訳書をモスクワのアカデミック・スタディーズ出版から出している。また、ススロフ氏はこれまで学会発表を 17 回行っているが、うち 3 回は本申請論文に関する査読付口頭発表で、デジタルヒューマニティーズの分野では世界最高峰の大会 DH2024 での発表も含まれる。このように、本申請論文はすでに国際的な評価を得ているといえよう。

結果、本審査委員会は、本論文の新規性と独自の議論を構築しようとする意欲、さらには人文情報学での知見を、一定の水準を超えるものであると評価することで一致を見た。口頭試問においても、審査委員からは肯定的で発展的な評価や意見が相次ぎ、本申請論文の学術貢献を期待するものであった。以上の審査状況に基づき、本審査委員会は全員一致でアルテム・ススロフ氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であると判断した。